

田口ランディ

くねくね日記

筑摩書房

くねくね日記 田ロランデ

筑摩書房

くねくね日記

二〇〇二年五月十五日 初版第一刷発行

田口ランディ

東京生まれ。広告代理店、編集プロダクションを経て、九〇年代半ばよりノンフィクション作家となる。また、一九九八年より独自のメール・マガジンを発行、ネットコラムニストとして注目される。著書に『忘れないよ！ヴェトナム』（二九六・ダイヤモンド社）、『癒しの森——ひかりのあめふるしま屋久島』（二九七・ダイヤモンド社）、『スカートの中の秘密の生活』（二九八・洋泉社）、『もう消費すら快乐じゃない彼女へ』（二九九・晶文社）、『馬鹿な男ほど愛おしい』（二〇〇〇・晶文社）、『コンセント』（二〇〇〇・幻冬舎）、『できればムカつかずに生きたい』（二〇〇〇・晶文社）、『アンテナ』（二〇〇〇・幻冬舎）、『ミッドナイト・コールド』（二〇〇〇・PHP研究所）、『ぐるぐる日記』（二〇〇一・筑摩書房）、『モザイク』『昨晚お会いしましたよ』（二〇〇一・幻冬舎）、『根をもつこと、翼をもつこと』（二〇〇一・晶文社）などがある。

著者

田口ランディ

発行者

菊池明郎

発行所

筑摩書房

東京都台東区蔵前二五三 二二一・一八七五五

振替〇〇一六〇八四二二三

印刷

明和印刷株式会社

製本

矢嶋製本株式会社

ISBN 4-480-81443-4 C 0095 Printed in Japan

© TAGUCHI RANDY

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三二一八五〇七 さいたま市榎引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八六五一〇〇五三

目次

二〇〇〇年八月・九月
いっしょにダンスを踊りましょう……………3

二〇〇〇年十月
人は成長ではなく分裂する……………37

二〇〇〇年十一月
空っぽはけっこう面白い……………63

二〇〇〇年十二月
朦朧として妄想に耽る年の瀬……………99

二〇〇一年一月
妄想を封じ込めるのは妄想なのだ……………127

二〇〇一年二月
寝てる間にも物語がすすんでいく……………167

二〇〇一年三月

表現者を慰勞してはいかん……………

193

二〇〇一年四月

世界の回転が速くなっている……………

221

二〇〇一年五月

転機には禊が必要なのだ……………

239

二〇〇一年六月

至福と苦悩は双子の兄弟なのだ……………

265

二〇〇一年七月・八月

私はいつも絶望しながら夢みている……………

283

二〇〇二年三月

あとがき……………

309

くねくね日記

裝幀・南伸坊

二〇〇〇年八月・九月

いっしょにダンスを踊りましょう

*八月三十日（水）

とまどう

ばかりの

わたし

筑摩書房さんのご好意で、日記を再開させていた
だくことになった。

去年一年間「ホットワイアード・ジャパン」に日
記を書き続けて、これがすっかり習慣化してしまっ
たものだから、なんだか書いていないと落ち着かな
い。一日の仕事の始まりに日記を書くとお自分の文章
のテンポが戻って来るような感じがしていいんだよ
な。でも、なんだってこんな半端な日に始めるのだ
ろう。どうせなら九月一日からにすればいいものを
……と自分でも思うのだけど、キリが良すぎるのつ
てあまり好きじゃない。半端がいいんだよ。はんぱ

が。

今日はB誌の編集の人に十五枚という原稿を頼ま
れたので、十五枚を書いた。私は頼まれた原稿はだ
いたい即日を書く。ためておくのが嫌なんだ。原稿
をメールで送ろうとしたら向こうからもメールが来
ていて「原稿は五枚でお願いします」と書いてある。
あれ、電話では確かに十五枚って言ったよなあ
……と思ったのだが、メールで五枚というのなら五
枚なんだろう。慌てて十五枚の原稿を五枚に縮めて
送り直す。やだなあ。「人はなぜ人を殺してはいけ
ないのか」なんてテーマで五枚なんて、だったら受
けなかったのに……と思う。

ところが、実はやっぱり十五枚だったのだ。

メールを送って下さった編集の方が何を勘違いし
たのか五枚と書き誤ってしまったらしい。私は以前
もB誌の編集部には原稿を送ったらその原稿がなくな

ってしまったことがあって、ちょっとムツときちま
った。すみませんすみません、どうかこれに懲りず
に今後ともおつきあい下さい、次はぜひ小説を……
なんて言われて、つい「イヤです」と答えてしまっ
た。

でも、よく考えてみるとこの担当の人はたまたま
運が悪かったのだ。

私が嫌だったのは前に原稿を依頼された別の編集
の人で、その人は原稿はなくすし、子供がいるから
夕方は電話しないでって言っているのに「すみませ
ん、夕方かけて……」と言いながら電話してくるし、
原稿料は教えてくれないし、振込み日は約束から二
ヶ月も遅れるし、振込み先もなくして何度も聞いて
きたのだ。その印象が積み重なっているので、つつけ
んどんな言い方になってしまった。

江戸の敵を長崎でとるような真似はいけないよな、
と反省して、再び担当者に「ごめんなさい、言いた
ぎました」のお電話をした。なんだか原稿を書くよ
りも編集者さんのお付き合いで疲れてしまって、あか

んなあと思う。

S 誌の人からも何度も手紙とかメールが来たので、
とつてもとつてもとつても丁寧にお断りのメールを
書いた。自分の気持ちを説明するのって難しい。そ
したら、その方から「文芸誌というのは、単行本に
する前に作品を発表してその反応を見ることができ
る、というメリットがあるんですよ」とお返事のメ
ールが来た。

へえ、そうなの？　つてびつくりした。だって、
文芸誌って評論家とか関係者みたいな人しか読んで
いないのに、そこで反応を見て単行本にするの止め
たりするんだろうか。それじゃあつまんないよなあ、
つて思う。それに、そんな反応を知るのは、私は怖
くてかえっていやだ。評論とかされたくない。やっ
ぱりあたしって、プロじゃないのかなあ……などと
悩む今日この頃。

ああ、もう夕方だ。こんなことをしているうちに
娘のお迎えの時間になってしまう。ふう。

*八月三十一日(木)

雷雨の朝

かみなりは

神なり

明け方、ものすごいしゃぶり。

夫が干しっぱなしの洗濯物を取り込んでいる。ゆうべはひどく眠くて、夜九時に寝てしまった。たぶん明け方四時頃に雨が降り出したのだろう。夢うつで目を開ける。

「昨日の夜、電話があつただけど名前を聞くのを忘れちゃった」と夫が言う。「すごいしゃぶりで。夕立ちじゃなくて朝立ちだ」私は寝ぼけながら「いい日朝だち」などと歌ってまた寝た。

七時に起きてから階下へ行き、朝食の支度をしてゐる夫に「ゆうべの電話って、男だった女の人だった？」と聞いたら、夫がきょとんとしている。「電話があつたって言ったじゃない」「言っていないよ」

「嘘さつき言つたじゃない」「言っていないよ、また夢でも見たんじゃないの？」

私は茫然とする。だって、夫は確かに言つたのに。でもあれは夢だったんだろうか。そういえば首筋に湿疹ができていたと思つたのに鏡を見るとない。あれも夢だったのか？　なんか変だ。今日の私はどうかしている。

朝から山の方でずっと雷が鳴っている。

朝一番で渡邊満喜子さんから電話がかかってきた。「今日、うちにいらつしやい。久しぶりに声を出しましよう」とおっしゃる。なんとなく気が乗らないので「きょうはね」とぐちぐちしていたのだが、満喜子さんがいきなり「実は二日前にあなたが私のビジョンに出てきたの」と、また恐ろしいことを言う。

「真っ白なドレスを着て、なんだかにつこり笑っているのよね」

「ヘーロー？」

「たぶん浄化が起こっているのよ」

「じょじょ浄化ですか？」

怪しい。

「そうよ。だから歌いにいらっしやい。メキシコ仕込みのおいしいタコスを作ってあげる」

「はあ……じゃあお言葉に甘えて」

というわけで、今日はこれから満喜子さんの家に行くことになった。変な日だ。私の妙な夢、明け方の雷、シャーマンの満喜子さんからの電話。

でも、最近は怪しい事から縁遠かったので、ちょっと嬉しい。

*九月一日（金）

バルトーク

を歌う

九月の始まり

うわー。ついに九月になっちゃったよ。

月がかわるのって、それだけで感激だなあ。

渡邊満喜子さんの家に行ったら、メキシコ仕込みのタコスをごちそうしてくれた。

本当に私がメキシコで食べたのと同じ味で、おいしくておいしくてガツガツ食べてしまった。それからビールとワインを飲んで、満喜子さんが歌を歌ってくれた。満喜子さんは歌によって他者の魂を知り、癒すことができる不思議な女性だ。元は某大手出版社の編集者だったと言う。「まさか自分がこんな非合理的な人生を歩むとは想像もなかったわよ」と以前に語っていた。

私にとってはお姉さんのような人。私が疲れているときにいつも電話をくれてすごく優しくしてくれる。

「ランディはどんどん大きく強力になってる、去年の十二月に初めて来た時と全然違う。あなたは天と地を光で繋ぐメディアになっっている」

みたいなことを言ってくれた。いつも褒め上手。なんだかありがたくて涙が出るよ。久しぶりに自分でも歌ったら、とても高い声が出たのでびっくりし

た。

「バルトークを聞いているようだよ」と満喜子さんが言う。ひー。まったく褒め上手だなあ。

声を出したら体がすかあとしたので、満喜子さんにつき合ってもらって藤沢で買い物をした。あさって、朝からNHKの生番組に出演するので、そのための服と靴を買った。あーモノを買ったのは久しぶりだ。服を買ったのは三ヶ月ぶりだ。ほんとに私はお金を使わない。せいぜいヤオハンで食品を買い回らいたもんなあ。お金を使うのって気持ちいいなあ。

そういえば幻冬舎の芝田さんが「コンセント」の印税が九月五日に入りますよ」という電話をくれた。「夫に車を買ってあげるんだ」って言ったら「田口さんは本当に飴と鞭の人ですね」という妙なコメントをしていた。

*九月二日(土)

インタビュ―

って

なんぞや？

昨日の夜は東京のホテルに泊った。

朝六時三十分にはNHKからお迎えのハイヤーが来て「おはよう日本」という番組でインタビュ―を受ける。前日にホテルのロビーで二時間も打ちあわせをした。私は七分のインタビュ―のために、プレ取材を四時間も受けたことになる。テレビってほんとに拘束時間が長いなあ。

でも、そのかいがあつてか、しっかりと本の表紙を映してくれたので幻冬舎の芝田さんはずっと喜んでた。しかし、私はむなし。いったい七分のインタビュ―で何がわかるんだろう。そんなもの何になるんだろう。私のコラムは一本読むのに五分もかからないけど、七分のインタビュ―よりずっと伝えたいことが詰ってるな、って思う。インタビュ―って安易すぎる。もっとインタビュ―というものを研究する人はいないだろうか。

いつたい、どうやったら良いインタビューができるんだろう。そもそもインタビューってものの目的はなんなのか。私はもう一度インタビューを再定義しようと思った。インタビューの目的は何なのか。

何を伝えることができるのか。あんまりにも形骸化してる。こんなのは手法じゃない。手法というのはもっと美しいものだ。いま流通しているインタビューには美学がなさすぎる。私はもっと素敵にインタビューされたいよ。私は取材というものをもう一度考え直すぞ。今みたいな取材の方法がまかり通っては世界はつまらんぞ。くそつたれ。

夜、なっちゃんママと新宿で待ちあわせ。

車に乗せてもらって湯河原へ帰ってくる。明日は、モモとなっちゃんとノリ君と三人で、小田原にお馬さんに乗りに行く。子供たちはお馬さんに会うのを楽しみにしている。今夜はなっちゃん母子は我が家にお泊まりだ。

夫が「あなたが出たテレビを観て、朝からご近所が大騒ぎだ」と言う。

やっぱりNHKの威力ってすごいんだなあ。

明日も天気が良さそうなので、午前中から子供らを連れて海にでも行ってみよう。

*九月四日(月)

カヌーと

地球と

山田和尚

風が気持ちいい。

ここ三日ほど、本当に蒸し暑かったけど、ゆうべから今朝にかけて空気が乾いてきた。空が秋の空です。

昨日の日曜日は朝から、なっちゃんとモモを連れて海へ。私は秋の海遊びの方が好き。人がいないし海もきれいだ。午前中、波乗りをして子供たちを遊ばせて、大急ぎでシャワー、昼食。午後からノリ君一家といっしょに小田原にお馬さんに乗りに行く。

子供たちはポニーに乗って大はしゃぎだ。

ノリ君ママと、なっちゃんママは、私のお母さん友達で、子供を遊びに連れていく時はいつもいっしょ。子供同士も仲良くて、野猿の子供のように騒ぎまくっている。

まったくうるさい。今月はこの三歳児を連れてデイズニールランドにオープンした新しいホテルに一泊二日で遊びに行くことになっている。ミッキーマウスの着ぐるみが、朝ご飯をいっしょに食べてくれるというオブション付きである。

城址公園の動物園でかき氷を食べて、再び大急ぎで家に戻り、着替えをもって今度は温泉へ行く。つまり「海↓馬↓象↓温泉」というフルコースだ。子供たちは車の中で爆睡しているが、絶対に寝かせるもんかという勢いで母親の方が気合いが入っている。さすがの三歳児も疲れたらしく、八時頃に家に戻ったら倒れ込むように寝ていた。ははははははっ、勝った！　って感じ。しかし三歳児と張りあってどうする。

金、土とあまり寝ていなかったのも、私も夜十時には倒れ込んだ。

結局、金、土、日と一行も書かない三日間であった。そしたら、あつという間に九月四日だ。こうして人生って過ぎていくのね……、と秋風にもの思う私……である。

今朝は不思議な夢を見た。

夢の中で私は「ある実写フィルム」の存在を知る。そのフィルムはとある刑務所における長期間にわたる女性虐殺の歴史を収めたもので、その刑務所では組織的に百年にわたって女性の虐殺が行われたのだと言う。

その理由は「男にとって女は永遠の謎だから」というものだった。フィルムには、女性を殺して内臓を取り出したり、輪切りにしたり、脳みそを食べたり、思いつく限りの女性虐殺の様子が収められていて、それはもう凄まじいのだけれど、なぜかそこに描かれているのは壮絶なまでの「好奇心」であって、清冽なほどなのだ。

私はそのフィルムを観ながら「男ってバカだな、こんなことしても女をわかるはずなのに」と思っている。

と……書いていたら、山田和尚から電話があった。いま、小田原でカメラを組み立てているところだと言う。今日の午後には伊豆半島に向けて漕ぎだすから、途中、どこかで乗ってくれとのこと。明日は東京に出るので、あさってなら合流するよ、とお返事する。

「なんかうまくいもん作ってくれ」と和尚は言っていた。

あさってだと熱海あたりまで来ているのかな。熱海からなら伊東あたりまでいっしょに漕げるかもしれない。今週は暇だからずっと付きあってもいいな。しかし、ちょっと海はうねっている。風も強い。今の風は向かい風だからカメラはきついんだよね。

夕方、真鶴の近くまで来たら携帯で電話くれるとのこと。モモといっしょに寿司と酒でももって、差し入れに行ってみよう。

*九月五日（火）

久しぶりに

海で冒険

できそうだ

月曜日午後三時過ぎに山田和尚から電話。声が暗い。

なんでも、酒匂川河口から相模湾に漕ぎだしてわずか三十秒で、波をかぶって水没したとのこと。だから今日は風が強いって言ったのに……。小田原はいきなり外洋なんだよ。海をなめたらあかん。荷物全部水をかぶって、今日は海岸に野営だという。午後から気温が下って来て降水確率は五〇パーセント。心配になって、娘のモモを保育園からピックアップしてから、小田原まで行ってみることにする。しかし、海の近くまでは車がないといけない。免許を持っていない私はこういう時、足がない。

そういえば、以前に小田原在住のメルマガの読者